

■身体を通じて、ことばとのつながりを考える



埴 狼星 氏 (はなわ・ろうせい)
空堀ことば塾主宰

1963年生まれ。京都大学理学博士(人類学、アフリカ研究)。2006年から大阪市中央区で地域の子どもたちを対象に空堀ことば塾を始める。2014年には人智学に基づく教育と芸術の実践を目的とした空堀アントロコミュを設立。

●地域に根差した教育のかたち

私は、空堀ことば塾という、いわば空堀の寺子屋のようなところを運営しています。藤田さんのところの「大阪芸術劇場」がある裏手の長屋に間借りをして、そこを拠点にして、小学生から高校生までの子どもたちに学校とは違うかたちで、地域に根差したような教育をと考えています。

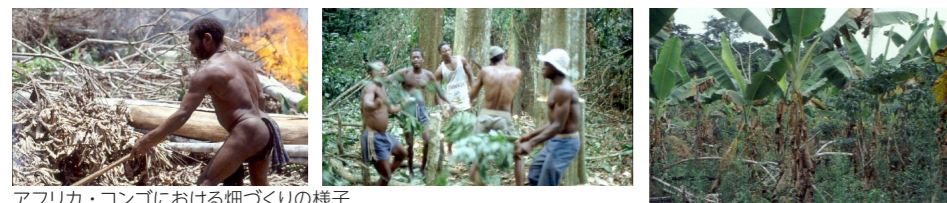
目指しているのは、子どもたちの身体とか意識にリアルに作用するような教育。その意味から、伝統の芸能や文化を子どもたちと一緒に学ぶことを活動の軸に据えています。

●多様性のなかにある力強さを

私は、以前、人類学の研究をしており、主にアフリカにフィールドワークで通っていました。そのうちに、生身の人間の力強さ、それから、ことばというものが持っている力、伝統とつながっていることから出てくる力強さというもの大切さを強く感じるようになりました。

その中心になるひとつの概念として、「半栽培」というのがありました。中央アフリカのコンゴ、熱帯雨林では、男たちが木を伐採して、そのあとに乾燥させて火入れをします。そこに、根菜、イモ類、またバナナやトウモロコシなども植えています。

そこは、日本人の感覚でみると、とて



アフリカ・コンゴにおける畑づくりの様子

も畑には見えない。日本の整然とした耕作地と比べ、あまりにも雑然とした畑です。ちゃんと整地して労働効率や土地の収益率を上げていくように管理すればいいのにと、日本人の考え方ではそうなる。ところが、調査を続けていくうちに、こういう、いい意味でのいい加減、良い按配で放置するというにも意味があるのだということがわかってきました。

畑の端の方には、ひこばえが生えてくる。畑のなかにも草がいっぱいあるが、当地の言葉には「雑草」というのがなくて、「雑」という否定的な評価をしていないということです。結果的に数年経つと、いろいろな植物が生えてきて、やがて、15年から20年くらいで森が再生してくる。

これを、日本とは文化が違うと片付けるのではなく、ここで出されていることを肯定的に考えようとするなかで、私自身が感じ取ったのは、ある程度良い按配で残していく、手を加えすぎない文化というもの大切さでした。

完全には栽培しないという「半栽培」ですが、結果的にそこには多様な植物が育ち、それがいきいきと成長していく過程を見たわけです。

●日本の基層にある文化を大切に

日本に帰ってきて、子どもたちに教える機会もありました。その際、完全に管

理化するというよりも、子どもたち一人ひとりの個性を認めて、その成長していく力、生命の力を育てるというのがとても大事に思えてきました。

人間の心というものは、太古から重層的で、古いメンタリティがどこかに残されています。それを日本のなかで考えると、日本では縄文から弥生にかけて、また古代から現代に至るまでの、先人たちが築き上げた文化を私たちは共有しています。新しいことを追い求めるのはもちろん大事ですが、もともと持っている日本人の基層になる文化というものを積極的に評価して、それを教育のなかにしっかり取り入れて意識化していくことが、一人ひとりの人間を強めていくのではないかと思うようになりました。

そして、空堀ことば塾をはじめたわけです。そこには、多様な子どもたちを受け入れ、できるだけ管理しないかたちで自主性を育てていく。かつ、できるだけ日本で、この場所なら、地域や上町台地が持っている文化を生のかたちで、子どもと半ば遊ぶようにしながら、伝えていくような場所にしたいと強く思い始めたわけです。

●森のような場所をつくりたい

そのバックボーンのひとつは、シュタイナー教育でした。ドイツのルドルフ・シュタイナーがはじめたもので、彼は古代から培ってきた叡智を現代の教育にどのようにつなげるのかの問題意識をもって教育に取り組みました。私も、先ほど言ったような関心と背景から、その勉強を続けています。

空堀ことば塾が最初にあったのは、空堀商店街の北の桃園公園横にある複合文化施設「萌」でした。最上階の屋根裏みたいなところでしたが、その二階には直木三十五の記念館があり、同館の人や地域の方々と一緒に活動もさせていただきました。それから、次に上本町西の路地奥の一軒家に移りました。そこでは、路地の文化に触れることになりました。地域の人と子どもたちが接するように



空堀ことば塾の風景



百人一首に取り組みながら創作活動にも展開



ひとりで落語の高座に上がるのは貴重な体験

なって、餅つきを一緒にしたり、芸能を見ていただいたりとか、温かく見守ってくださった。そして、そこから昨年4月に現在の西 賑町に移りました。

いずれも、いわば森のような、動物とか植物とかのいろんな生きものが集うように、子どもたちやお母さんたちが憩い、そこで手軽に本に触れ、日本が培ってきたことばにも触れるような場所をつくりたいと、そう思って活動しています。

●身体とことばはつながっている

塾の中では、落語と囲碁と百人一首は、活動の当初からずっと続けてきています。

田辺聖子さんが、日本の文化を勉強するには、百人一首をやればいいと書かれています。小学生の時とはかく覚えて、中学生になったら意味を少し理解し、高校生になったら作家はどういう人物だっ

たのかを当時の歴史も踏まえて勉強したらいいだろうと。そうすれば、日本のことばと文化を立体的に理解できると。実際、子どもたちも、続けているうちに、それぞれお気に入りの歌人ができたり、百人一首は関西の歌が多いので、そういう文化に触れたりもします。

落語の方は、主に冬から春にかけて、5分くらいのネタを一人ひとりが覚えて、高座に上るということをしています。高座に一人で上がるというのは子どもたちにとっては、ものすごく緊張すること。それを終えることで、通過儀礼というか、とてもさわやかな顔になる。

落語がいいのは、演者だけでなく、聴衆がすごく親切に笑ってくれること。そういう人との温かいつながりが子どもを強くしていく。また、囲碁は、上町台地の文化とは言い切れませんが、手談しゅだんと言って、

指しながら、手を使って話をする。

これらの日本の伝統文化は、身体とすごく関係が深い。だから、学校で一般的な近代的体育をやるよりも能や狂言など演芸も含めて、身体を通じてことばとのつながりを考えることが、実際はとても大切だと思われる。それをやっていると、子どもたちが、だんだんと自信をもっていく姿がしっかりと見てとれます。

そういう日本の文化の中の、いわば腹の座ったことばには、なかなか学校では出会わない。だから、そういう、しっかりと話す大人のことばを聞く機会を子どもたちに提供して、実際に演じて、身体とことばがつながっているということに気付いてもらいたい。その意味でも、上町台地というのは、すごく恵まれたインスピレーションを与えてくれる場所だと思っています。

肥田先生の上町台地とびきりのもう一言②

●学生時代の直木三十五



一柳安次郎の自筆原稿 直木三十五についての心覚え

空堀から長堀通りを北に渡った坂道に榎木大明神があります。そのあたりで直木三十五は大きくなりました。

直木は、大阪の市岡中学を卒業していますが、その市岡で、一柳安次郎という国漢の先生に教わった。今の大阪市歌は「高津宮の昔より～」で大正の末に公募で選ばれたものですが、その前の明治時代からの「霞こめたりいこま山～」の作詞をされたのが一柳先生。

その一柳先生が、市岡の同窓会で直木のことをお話しされた。そのときに、先生が書きはった心覚えの原稿が4枚。これが私の手元に今あるんです。

私は、これを名古屋の永楽屋から買いました。『日本古書通信』ゆうのがあって、昔は、一流の古本屋がみなこの雑誌に広告を載せた。私はそれを長年見ていて、あるとき目録の中に、一柳安次郎自筆原稿、直木三十五を語るという内容に目が止まり、えっ、珍しいものがあるわと、注文したら送ってきたんです。

この先生は『漫録窓から』(大正12・1923年)という本を書いている。また、『上方』の第5号(昭和

6・1931年)に大阪の落語家の思い出についても書いた。この内容がすごい。今、明治の大阪落語史を知ろうと思ったら、これが基本の文献なんです。

この一柳先生が言うには、直木は在校中は非常に寡黙な、もの言わん、ちょっとつんとした感じもある子やったそうです。漱石なども読んでいたようですが、将来、時代小説の巨匠になるとはとても想像できなかった。

4年生のときに皆勤賞をもらうてんです。まじめな生徒さんやったようです。良く言えば純真無邪気、ちょっと悪いふうに言うたら、負け惜みのやせ我慢というのが直木の感じやったと。

卒業の前の年に、生徒会で講演して雄弁を振るった。その演題の大きいこと。「本年の卒業生の傾向を論じ、あわせて帝国の将来を憂う」(笑)。

そういう人物ですが、のちに、深くつきあう人は直木の気骨を感じて、菊池寛のようにほんとうの親身な友になったわけです。ということを一柳先生も結びに言うております。菊池寛が彼の逝去を悼んで直木賞をつくり、今もその名を残しているわけです。

肥田先生の 上町台地 とびきりのもう一言③

●松屋町あたりの出版社



空堀のあたりは戦災にあいませんでしたので、澤井さんのところ（寄席・澤井亭）も残されました。

私は島之内生まれで、子どもの頃は、自分の小学校の校区内から外に出るというのは大冒険みたいな感じ。それで、空堀の方にはなかなか来る機会がなかった。末吉橋渡って、空堀の坂に差しかけたら、松屋町筋からの商店街の入口に餅屋がございまして、いろんな餅が並んでいる上に鏡がずっと並んでいる。下の餅が鏡に映って、店先がものすごく派手なんです（笑）。灯りが明々とともにね。そこまでしか、子どもときはよう来なんだですね。

空堀の西賑町は戦災でも焼け残った。大阪の中央

部は全部戦災におうて、出版社なんか全滅したけれども、西賑町に全国書房、三島書房というのがやっていたね。織田作之助の『猿飛佐助』や『六白金星』とかは三島書房から昭和21(1946)年に出てますな。三島はそのほか、藤澤桓夫の『大阪五人娘』、宇野浩二の『枯れ木のある風景』も出版しています。全国書房はちょっとハイレベルの本屋。戦争中は石浜純太郎の『浪華儒林伝』、その前は土橋真吉『河内先哲伝』なども出しています。空堀でも、大阪の出版活動に見るべきものがある。その流れで、手塚治虫の『新寶島』があるわけですね。手塚の秀作がここから生まれたと。これはたいへんなことなんです。

付記 『大阪の歴史』第69号（大阪市史編纂所 平成19年）に掲載された座談会「城南地域の再発見」でも、肥田先生は上町台地の文化について詳しく紹介されています。

会場のみなさまと“ことば”の交換

肥田 藤田さんのところが、長くおうちに伝わってきていた掛け軸や絵画、屏風の類を大阪歴史博物館にご寄付なさっております。私も博物館で拝見しました。一級の江戸時代の絵画作品。大阪のご旧家は、昔はおうちごとにそういう作品をお持ちだった。その文化の水準の高いこと。大阪はそういうところでした。

橋爪 その藤田さんは、今「大大阪芸術劇場」というのを路地の建物を改装してやられてます。

藤田 あそこは、明治の中頃に建った長屋だったところです。壁は漆喰ですので、音の吸収はいい。ガラスも木もすべて昔のままなんです。今年のクリスマスには、戦前のクリスマスレコード、こないだは服部良一さんのジャズのレコードのコンサートをしました。暗いところで聴いていたら、何か昔の人も聴いているようですね。

会場1 大大阪芸術劇場はユニークなスペースですね。若手の落語家だとか、子どもを含めた落語の会などに使われたら、とてもいい感じだなと思います。

藤田 ただ、三軒の長屋をそのままぶち抜いたので、柱がたくさんある（笑）。来た人にじゃまだと言われます。でも柱取ると建物が倒れてしまう（笑）。不便なことを面白がって使ってくださる人があればと思ってるんです。

橋 私たちも今度、大大阪芸術劇場で子どもたちの舞台をやらせていただくことになっています。

藤田 空間は広いので、子どもさんが使ってくださいれば、わりと自信になると思いま

す。人前で何かをするのはものすごく勇気があるものですからね。

橋 子どもの落語では、何分も立ち往生してしまったりもします。失敗しても経験。それも間合いを学ぶいい機会になる。

橋爪 実は、藤田さんは大阪でパリ祭をしようと企んでいる（笑）。屋根の上になにか建てようとか。

藤田 凱旋門をつくろうとか言うてる人もいます（笑）。

橋爪 その上にエッフェル塔建てたら、まるで初代の通天閣ですな（笑）。

藤田 昔、うちの家は晒し蠟をつくっていて、前の路地がちょっと場所が広い。そこが舞台になるから、そこでお祭りのときに、俄芝居をやろうやないかと。俄というのは路地芸。素人が即興で面白いことをしたりする。でもまだ何も決まっていません。行き当たりばったり。

橋爪 ほんまに迷宮ですな（笑）。

会場2 直木三十五のことですが、先ほどの先生の原稿によりますと、ある事件を学校で起こし、それで父兄を呼び出したということが書いてある。これは新事実ですね。それと、4年生のときに皆勤賞をもらっていますが、月謝は払ってないんです。それでよく皆勤賞が出たなあ（笑）。

会場3 空堀の路地で話されていた言葉ですが、文字になったものだけでなく、昔の話し言葉も残していくべきではないかと思えます。空堀界限の高齢の方の言葉なども録音で残していくようなことはできないのでしょうか。



藤田 今は、路地の言葉を話すお年寄りといっても、私が一番古いくらい（笑）。現実的には、もうちょっと難しいですね。

会場1 落語の古典は、言ってみたら上町台地のタイムカプセルみたいなところがありますね。上町台地を舞台にした落語はすごく多い。ただ、今の若手の落語家さんは、どんどん言葉を変えていくので、言葉を残していく点では難しいでしょうね。

会場4 船場言葉については、今も朗読会を開いている方などがいらっやいます。大阪は新町言葉、島之内言葉、船場言葉と、筋が違えば言葉が違うと言われましたが、いろいろきれいな言葉があるので、私もそれをなくさないで蒐集できたらいいなと思っています。

橋爪 画家の小出樞重は名随筆家でもありますが、その随筆を、本人なら島之内言葉でどう話すのかということで、お孫さんにおねがいがいたことがある。でも微妙に違うのだそうです。それに、小出は東京の学校に行ったので、東京の言葉が入っている。また、小出家は芦屋に行くからやがて阪神間の言葉も入ってくる。

会場4 反対に、阪神間には大阪の人たちが行かれたから、大阪の古い言葉がまだ生き残っているということもありますね。

橋爪 これはとても面白いテーマ。どこかでぜひ研究してほしいですな（笑）。 